

乳幼児のための音のでるおもちゃ制作プロジェクト —学生とれもん会社の協働による子育て支援の試み—

松井 典子

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

The Project of Toys Which Make Sounds for Infants

Noriko MATSUI¹⁾

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：音を介した乳幼児のための遊びを創造する目的で、音のでるおもちゃを本学の学生と社会福祉法人湘南学園障害福祉サービス事業所れもん会社が共同で開発した。開発したおもちゃは、乳幼児総合研究所「すみれが一でん」の保育実践の中で紹介した。本稿では、学生とれもん会社の共同制作の過程におけるさまざまな学生の学びを明らかにする。さらに、保育実践における音のでるおもちゃを介した子どもの遊ぶ姿、子どもと保護者のかかわりについて学生の視点による観察記録及び考察を紹介する。

キーワード：音のでるおもちゃ、音あそび、乳幼児と音、音の表現、子育て支援

1. はじめに

本稿は、2018年度の専門演習Ⅰ及び専門演習Ⅱの授業において本学の学生と社会福祉法人湘南学園障害福祉サービス事業所れもん会社（以下れもん会社）¹⁾と共同制作した『乳幼児のための音のでるおもちゃ制作プロジェクト』の実践報告である。おもちゃの発案は学生が行い、案をもとにれもん会社と共同でおもちゃを開発した。おもちゃの制作は、れもん会社に依頼した。共同開発した音のでるおもちゃは、本学乳幼児総合研究所「すみれが一でん」の保育実践において乳幼児と保護者に紹介した。

「すみれが一でん」では、地域の未就園児親子約40組（毎年参加者を募集・会員登録制）を対象に、月に2回（木曜日、午前10時から午後12時頃）乳幼児総合研究所のスタッフや学生が考えたプログラムを実践する取り組みを行っている。本活動は学外実習に加え、地域の未就園児親子と触れ合う貴重な機会となっている。「すみれが一でん」は、地域の子育て支援を担うとともに学生の保育実践の場として重要な役割を果たしている。

本稿では、「すみれが一でん」における保育実践後の学生による観察記録を基に、音のでるおも

* E-mail: n-matsui@sumire.ac.jp

ちゃ制作を通じた学生の学び、乳幼児と音との出会い、さらに音を介した親子のかかわりについて考察する。

2. プロジェクトの実実施計画及び方法の概要

2.1 専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱ

「音のでるおもちゃ制作プロジェクト」は、2 回生開講科目で卒業必修の専門演習Ⅰ及び専門演習Ⅱの授業で行った。本科目は、幼児教育保育学科の教員の専門分野を学生が主体的に学ぶことを目的としている。1 回生後期に各教員は、専門や研究内容等のキーワード及びメッセージを学生に発表し、希望調査を実施する。学生は、興味や関心をもった演習クラスを自由に選択し、希望理由を記述する。

2018 年度の専門演習クラス（松井）のキーワードは、「音楽づくり」、「音楽表現」、「音あそび」、「リズムあそび」である。メッセージには、『音楽を通して乳幼児のための「あそび」を創造し、発信すること』とし、14 名の学生（女子学生 11 名、男子学生 3 名）が履修した。

2.2 プロジェクトの背景

現在、乳幼児のためのおもちゃは、一般向けに大量販売されているが、子ども一人ひとりの特性や発達に応じたおもちゃは少ないのではないかという疑問を抱いた。「おもちゃ」は、乳幼児の情緒を育み、心身の発達過程において重要な影響を与える。2018 年の専門演習の授業内容は、「音」を介して生まれる子どもの遊びを学生が主体となり創造し、外部に発信することをねらいとした。「音」と「おもちゃ」の観点から、音のでるオリジナルのおもちゃの制作過程を通して乳幼児と「音」との出会い、さらに「音」を介した親子のかかわり（コミュニケーション）を探究することを目指した。

プロジェクトの共同研究者であるれもん会社は、本学の実習施設である。現在れもん会社では、『障がいのある子どもを主役としたおもちゃ』の開発を療育機関やボランティアの方々と取り組んでいる。おもちゃ開発のきっかけは、「幼少期にどのようなモノで、どのように遊んできたか」をれもん会社に通う社員にれもん会社がアンケート調査した結果、既存のおもちゃでは充分遊びきれなかったのではないかということが判明したからである²⁾。さらに、アンケート結果の考察では、「幼少期は、遊びの中で様々な感覚を育み、手指等の身体の動かし方を体験しながら学んでいく。そしてそれが生活の基礎になっていくと考えると『遊び（おもちゃ）』の大切さを再確認することができた³⁾」と述べている。

前述のれもん会社のおもちゃ開発の取り組みと専門演習クラスの音のでるおもちゃの制作の目的を融合し、共同研究することが決定した。

2.3 実施計画

本プロジェクトは、2018 年 5 月 22 日（火）にスタートした。れもん会社と本学を相互に訪問し、

音のでるおもちゃの完成に向けてプロジェクトを進めた。第1回のれもん会社の訪問では、職員の方々との顔合わせや施設見学、れもん会社の取り組みを伺い、プロジェクトの進行方法等について協議した。

学生が主体となりオリジナルの音のでるおもちゃを発案することを目的とするため、事前に身近な素材と自然物を用いた手作り楽器の制作を授業に取り入れた。第1回から第5回にかけて「日常の音に親しみ、さまざまな音を探索する」をテーマに授業を行った。はじめに、乳幼児の発達を踏まえながら、「モノ」と身体動作の関係性により作り出される「音」や音のなる仕組みを確認した。また、身近な打楽器（タンブリン、鈴、ギロ、ウッドブロック等）や民族楽器（写真1 チャフチャス、レインスティック、カシシ等）から音のなる仕組みを観察し、実際に音を奏でる中で素材の組み合わせによる音の違いや動作に関連した音の強弱の変化等、音をならす方法や楽器の素材について研究した。学生は、生活にあふれている身近な音をはじめ、「モノ」を通したさまざまな音色の存在に気づき、音のでる仕組みについて知識を深めた。

れもん会社と共同で実施したミーティングの日程及び内容は、表1のとおりである。

表1 れもん会社とのミーティングの日程と内容

第1回	日時：5月22日（火）5限	場所：れもん会社
<ul style="list-style-type: none"> ・顔合わせ ・講話（れもん会社の取り組みについて） ・施設見学 ・音のでるおもちゃプロジェクトについて 		
第2回	日時：6月26日（火）5限	場所：れもん会社
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が発案した3つの音のでるおもちゃの提示（学生によるプレゼンテーション） ・意見交換及び改良点をグループごとに討議 		
第3回	日時：7月24日（火）5限	場所：れもん会社
<ul style="list-style-type: none"> ・れもん会社による「木」の講習会（素材の特性や制作時の留意点を解説） ・グループ討議（試作に向けて） 		
第4回	日時：9月25日（火）5限	場所：滋賀短期大学3号館321教室
<ul style="list-style-type: none"> ・試作品の完成 ・改良点について意見交換 ・グループ討議（最終打ち合わせ） 		
第5回	日時：11月27日（火）5限	場所：滋賀短期大学2号館211教室（プレイルーム）
<ul style="list-style-type: none"> ・音のでるおもちゃの完成 		

・れもん会社による完成品の説明

第6回 日時：12月6日（木）2限 場所：滋賀短期大学2号館211教室（プレイルーム）

・滋賀短期大学乳幼児総合研究所「すみれがーでん」の保育実践において音のでるおもちゃを紹介

写真1 民族楽器（左から チャフチャス、レインスティック、カシシ）



2.4 音のでるおもちゃ開発

今年度は、3つのグループに分かれ、3種類の音のでるおもちゃを発案した。第1回目のミーティング終了後、それぞれのグループはおもちゃの対象年齢、音のでるおもちゃのコンセプト、遊び方等を協議し、図案化した（写真2）。その図案をもとに第2回目のミーティングでは、各グループの代表者がプレゼンテーションを行い、れもん会社の方々とグループに分かれ意見交換を行った。第4回目の試作品の制作までに、れもん会社から改良点等の提案（写真3）を受け、最終の制作依頼を行った。

3種類の音のでるおもちゃの概要と各グループの参加人数を以下にまとめる。

カホン型おもちゃ（男子学生 3名）

対象年齢：3歳児から5歳児

コンセプト：『子どもと大人、または子ども同士が音を真似たり、音との対話（コミュニケーション）を楽しんだりすることができるおもちゃ』

音のでるゾートロープ（女子学生 5名）

対象年齢：5歳～

コンセプト：『音と視覚を同時に楽しむことができるおもちゃ』

トイボックス（女子学生 6名）

対象年齢：乳幼児

コンセプト：『聴覚、視覚、触覚を通して身体の発達段階に応じ、さまざまな遊びができるおもちゃ』

写真2 学生による図案（第2回）

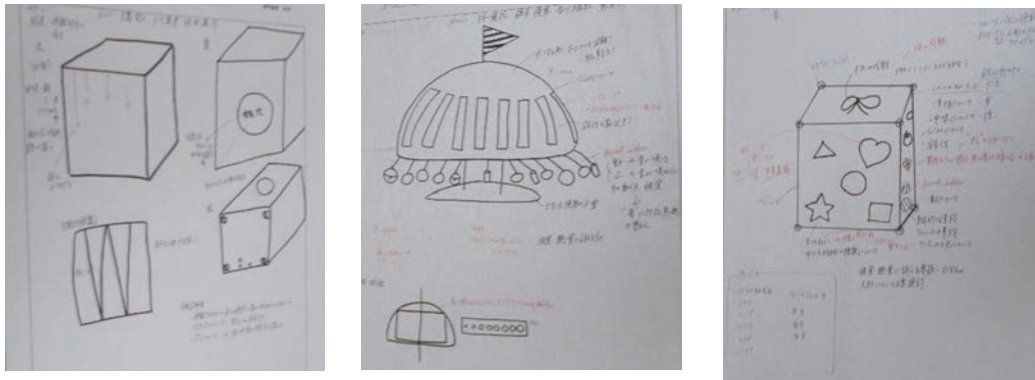


写真3 れもん会社からの提案（第4回）

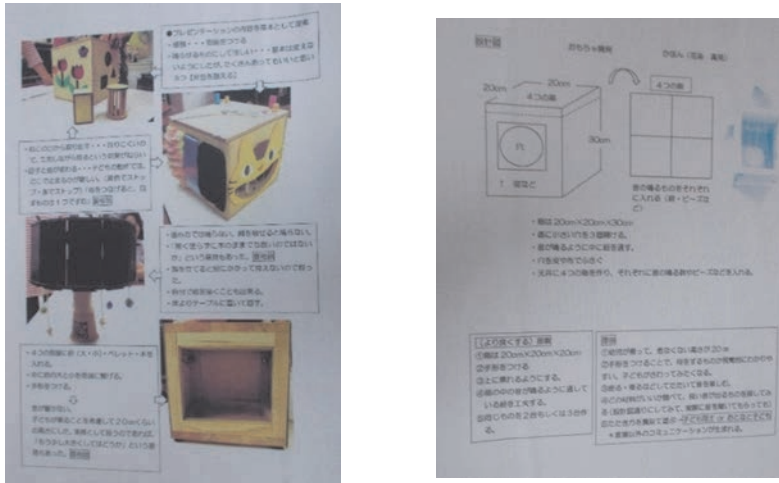


写真4 完成品の説明（第5回）



今年度は、以下のそれぞれ特色ある3つの音のでるおもちゃを学生とれもん会社が共同で開発した。

「カホン型おもちゃ」のカホンは、既存の楽器である。ペルーのアフリカ系民族が使う一面に響き穴を持つ木箱の太鼓で、木箱の上に座り表面を両手で叩いたり、かかとで表面版を押さえて音を変えたりする⁴⁾。この楽器から着想を得て、カホン型おもちゃを考案した。学生が考案したおもちゃは、木箱の上に座り音を鳴らすことを目的としていない。木箱の傍らに座り、その側面を叩くことによって音による対話ができないかと考えた。れもん会社からは、おもちゃの対象年齢と安全面を考慮し、学生が発案した大きさよりも小さく設計する提案があった。また、視覚的にわかりやすく、おもちゃに興味をもってもらうように箱の側面に子どもの手形やイラストを描くアイデアがあった。

音のでる工夫として、木箱内に4つの部屋を作り、鈴やビーズを入れ、木箱を叩く位置によって様々な音色がでる仕組みにし、音の変化に面白さを感じることができるおもちゃに仕上げた。「カホン型おもちゃ」は、子ども同士で遊ぶこと、子どもと大人と一緒に遊ぶことをコンセプトにしている。勿論、一人で楽しむこともできるが、一緒に遊ぶ場合は、音を共有する楽しみを体感できるおもちゃである。

「音のでるゾートロープ」は、ゾートロープ（回転のぞき絵）から着想を得た。ゾートロープは、円筒の側面に縦にスリットを入れ、その内側の面に静止画を貼り回転させ、側面のすき間からのぞくことで絵が動いて見える仕組みになっている。音のでるゾートロープは、視覚的な遊びだけでなく、円筒を回すことによって音のでる仕組みを加えたおもちゃである。内側に貼る静止画は取り外しが可能なため、子どもが好きな絵を描くことも遊びの一つとして考えた。

「トイボックス」は、0歳児から5歳児までの感覚機能や身体機能の発達に応じ、子どもの成長を通して遊ぶことを目的とするおもちゃである。トイボックスのそれぞれの面には、視覚や聴覚に障がいのある子どもも楽しめるよう工夫が施されている。「○、△、□の型がくりぬかれた面」、「異なる素材の布を貼り付けた面」、「レバーを回すことで色が変わっていく面」、「紐を結んだり引っ張ったりできる面」と底面以外の全ての面で遊ぶことができる。また、型がくりぬかれた面には、○、△、□の形の積み木の中に鈴を入れた音のでるおもちゃを入れることができる。それぞれの形のおもちゃは、単独で遊ぶこと、型にくりぬかれた面に合わせて音のでるおもちゃを出し入れする遊びや音のでるおもちゃを落とした際に音を楽しむことができる仕掛けになっている。聴覚だけではなく、触覚や視覚といった感覚を統合した遊びが経験できるようおもちゃを開発した。

2.5 倫理規定

研究実施に際しては、滋賀短期大学の研究倫理審査申請書を提出し、同委員会で承認を得た。専門演習の学生とれもん会社には研究実施前に、口頭および説明書を使用して研究の目的や方法、個人情報保護、データ管理方法および用途を十分に説明し、了承を得た上で実施した。また、すみれが一人でにおける保育実践では、参加親子に研究の趣旨を説明し、写真撮影について同意を得ている。

3. 音のでるおもちゃの紹介（保育実践）

保育実践では、プログラムの前半に学生と参加親子でクリスマスソングを歌ったり、楽器演奏を楽しんだりした。音のでるおもちゃは、後半にクリスマスプレゼントとして子どもたちに紹介した（写真5）。

表2に保育実践の概要を示す。

表2 保育実践の概要

実施日	2018年12月6日（木）
時間	午前10時45分～11時30分まで
場所	滋賀短期大学 2号館2階 乳幼児総合研究所プレイルーム
参加者総数	43名（保護者等を含む） (子どもの月齢:0歳児 6名, 1歳児 3名, 2歳児 14名, 3歳児 2名 合計25名)
参加学生	14名
れもん会社	1名

「すみれが一でん」における保育実践終了後、音のでるおもちゃの制作過程における気づきと保育実践の観察記録を課題とした。

4. 観察記録

観察記録では、《音のでるおもちゃとこどもの姿》《子どもと音のでるおもちゃと遊ぶ保護者の姿》の2つの視点による考察を自由記述で求めた。さらに、《本プロジェクトを通した気づき》と《専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱを通した学び》について自由記述で考察及び感想を求めた。

以下にそれぞれの設問に対する学生の考察及び感想の一部をおもちゃごとに分類し、紹介する。

設問Ⅰ 音のでるおもちゃと遊ぶこどもの姿（反応）、言葉等気づいたことを述べてください。

【カホン型おもちゃ】

・初めは慣れないことに戸惑う姿や元気な子、母親から離れようとしないうちなど様々であったが、しばらくするとおもちゃに寄ってきてくれるようになった。おもちゃは楽しんでもらうことができたと思う。けれど対応力が少しいつもと違って難しかった。

・音がどうやったら鳴るのかを自分なりに試して探していた。音がでたら楽しそうに見えた。

・私たちがつくったカホンを基にしたおもちゃは、叩いて音を鳴らしたり、揺らしたりして音をだす

という楽しみ方をしている子どももいれば、サイコロのようにコロコロと転がし音をだすことを楽しむ等、計画していたような楽しみ方をしてくれてとても嬉しくなった。また、乱暴に投げたりしないかという点を心配していたが、全くその様子もなく、大きなトラブルもなく、大切に扱ってくれて良かったと感じた。イラストを描くことによって興味を持ってくれる子どももいた。

写真5 クリスマスプレゼントとして紹介



【音のでるゾートロープ】

・ゾートロープのおもちゃで遊ぶ時に人数が多すぎたので回すことに集中しすぎてゾートロープには気づいていなかった。けれど、気づいた子どもは楽しそうに「動いているー」と楽しそうに言っていた。

・子どもたちはとても反応がよく嬉しかったです。最初は遊び方が分からずに戸惑っている子どももたくさんいましたが、教えてあげるとどんどん遊びだしていました。

・何人か子どもが走ってきてくれたのですが、使い方や遊び方を説明する間もなく、ひたすらグルグル回していた。何度かもう少しゆっくり回して隙間から見てみると数人が絵が動いているように見えるのに気づいてくれたが、やっぱりひたすら勢いよくグルグルと勢いよく回す物ようになっていた。また、子どもたち2、3人くらいで一緒に回すのが難しく、回している子同士で取り合いや独り占めになっていた。

【トイボックス】

・自分たちの考えたおもちゃで遊ぶ子どもたちを見て想像していた遊び方をする子とそうでない子がいました。箱の中にすぐ手を入れて中の物を取ろうとしている子がいて、やっぱり〇は取り出しにくそうにしていました。また、天板を止めていたニコちゃんやてんとう虫を取ったり、回すハンドルの取れる部分を取り外してみたりと細かい部品を口に入れてそうで怖いなと思いました。初めはネコの口

から取っていたけれど、天板が外れて上からでも取れることに気づくと、ほとんどの子どもが上から物を取り出していました。

・トイボックスの鈴が入っているおもちゃを口の中に入れていた。おもちゃの布の部分にはあまり興味をしめすことがなく、触っていない子が多かった。紐の部分は結ぶのではなく上に引っ張っていた。箱型のおもちゃの色が変わるチューリップの部分は、色が変わるのを不思議そうにじーっと見つめていた。色を回すところは箱型のおもちゃで遊んでいた子のほとんどが触っていた。

・チューリップの色の变化に気づいている子どもがいてじーっと見て「あ、色が変わった」と言っていました。少しだけおもちゃの遊び方を言ってしまったが、子どもたちはあまり聞いていなかったようで、自由に遊んでいるようでした。手触りの所は0歳児には人気でした。1, 2, 3歳児には色の变化と形入れ、紐の所が人気でした。紐の面ではくくってみたり、押しピンのところにまきつけたりと自由に遊んでいました。型入れの色や中に入っている鈴などの音を気にしている0歳児の子がいました。

・くるくる回したり、箱に穴を入れて楽しむかなと思っていたが、それを振って遊ぶことを楽しんだり、上のふたをとって遊ぶことを楽しんでいる子どもが多いと感じた。絵が変わる所では、くるくる回し、絵の色の变化を「あ!」「変わった!」など楽しんでいる様子を見ることができた。

設問Ⅱ 保護者の様子(反応)言葉等気づいたことを述べてください。

【カホン型おもちゃ】

・子どもと一緒におもちゃを使って遊び、「〇〇ってなっているよ」とか「すごいね」などの声かけをしていた。

・保護者の方もカホンという楽器を初めて見たという方が多く、子どもと一緒に触れてみる等、手探りな様子が見られたが、様々な音の出し方があるという点を魅力に感じてくださった方も多くみられた。また、四角い木製なので、子どもが怪我をしないか、投げたりしないかという点から見守っておられる保護者の方が多かったように感じた。

写真6 カホン型おもちゃと遊ぶ子ども



【音のでるゾートロープ】

- ・少し後ろから回っている時にすき間をのぞいて、「すごい」と言ってくださっていた。
- ・子どもの後ろで一緒に中の絵をのぞいて見てくださっていて「どうなっているの、すごい！」と言ってくださりました。どうなっているか丁寧に説明を他のメンバーが伝えてくれていてそれでもびっくりしている反応が見られたかなと思います。
- ・家にはない目新しいものに子どもが興味津々で一緒に楽しんでおられました。対象年齢をバラバラにしたおもちゃなので、自分の子どもにどんなおもちゃが合っているのか新たに知ることができたようでした。
- ・「さわってみよう」と言葉かけをしていた。一緒に遊んでいた。
- ・子どもが戸惑っていたらすぐに手助けをしてしまっていて子ども自らが行動するということが少なかった。音のでるゾートロープの所にいた保護者は、近くから見守っていて、とても楽しそうに見ていた。説明をしたら興味をもってくれた。

写真7 音のでるゾートロープと遊ぶ子ども



【トイボックス】

・おもちゃを見た際「凄い」「かわいらしい」という声が聞こえました。子どもが「ねこバス」というと「本当だね、〇〇ちゃん好きなキャラクターだね」と笑顔で遊んでいる姿を見ておられました。おもちゃを子どもと一緒に触れながら「これはどうやって作ったんですか」と尋ねてこられる方もおられました。

・子どもが楽しく遊べるように、また遊び方がわかるように子どもと一緒に遊ぶ姿がたくさんみられた。その一方で子どもたちに自由に遊ばせ、優しく見守る姿もあった。

・子どもと同じように保護者も不思議そうな顔でおもちゃを見たり触ったりしていた。保護者の方も自ら音のでるおもちゃに興味や関心を持った表情をしていた。

・初めは「すごい」や「嬉しいね」などと言っただけで作って良かったなと思いました。でも、遊んでいくにつれ、〇が取り出しにくいから上から開けたままにしたり、保護者が取ったりしていました。れもん会社の方は、その取りにくい〇を子どもたちがどのように取るかや子どもが頑張って取り出そうとする意欲（力）を引き出すために作られたけど、やっぱり保護者がいると手を出してしまうなあと感じました。

・「見て、ここの中に積み木が入っているよ」「ここに入れてごらん」「色かわったよ」「みてみて」と子どもに遊び方を教えているような様子が多かった。また、猫の口から手を入れて取り出すのではなく、上の蓋を取ることができることを知り、子どもたちが入れた積み木の蓋を開けわたしてあげていた。そのため、子どもたちが自ら口に手を入れて積み木を取ろうとする行動が少なかったように感じた。

写真8 トイボックスと遊ぶ子ども



設問Ⅲ 音のでるおもちゃ制作プロジェクトを通して気づいたこと、感想等を述べてください。

【カホン型おもちゃ】

・音のでるおもちゃの制作では、どうすれば音がでるかという技術面や視覚での楽しみ方、子どもを対象としているので安全面にも考慮する必要があるのととても大変だった。しかし、最善を練り、その要望に応え更なる改善点を考えてくださるれもん会社の方々のお陰でより質の高い意見のもと、おもちゃが完成した時にはとても嬉しく、すみれが一でんを通して、実際に子どもたちに遊んでもらえたこともとても貴重な体験となった。れもん会社の方々には心から感謝したい。

・おもちゃ制作といったことはめったに経験できないことを経験させていただいてよかったと思います。母親、父親の前でつたない保育を実践することは、保育実習より緊張した。

【音のでるゾートロープ】

・前々から音のでるおもちゃに興味があったのですが、前半の授業では自分たちで身近な物で楽器づくりをして、自分が作る時も友達のをしている時も「こういう音がでるのか」や「考えがすごいな」「〇〇の歌とかにも合うかも！」など新しい発見がありました。後半では、音のでるおもちゃ（れもん会社さんとの共同制作）だったのでまた少し違って更に本格的に考え、案を作りました。想像をし、子どもがみんな楽しく遊んでくれるのか、また安全面はどうか考えるのが難しく、沢山問題がでたりしたけれど、実際作って下さったのを見るとワクワクしました。また、すみれが一でんで子どもたちが楽しそうに遊んでいるのが嬉しかったです。触ったり、見たり、聞いたり、色々な面で楽しめるようなおもちゃは子どもたちが喜んで楽しく遊んでくれるのかなと思いました。

・耳が聴こえない、目が見えない人たちでも楽しめるおもちゃを今回れもん会社の方と話し合っ作ることができ、とても良い経験ができました。子どもたちが興味をもって回したり、音をだしたり、形をはめていったりなどできるおもちゃが他にもあるといいなと思いました。

・はじめておもちゃを一から制作し、とても良い経験になりました。自分たちは、子どもにとって良いと考えたアイデアも他のチームやれもん会社の方の意見を聞いて改善点がたくさん見つかりました。目でも耳でも楽しむことができるおもちゃを完成させることができ、本当に良かったです。

・ゾートロープはなかなか難しかったが、子どもが理解してくれてとても嬉しかった。この経験を生かしていきたいです。

・おもちゃは、内も外も丈夫にすることが大切だと気付きました。プレゼンなどとても緊張しました

が、とても良い経験で楽しかったです。

【トイボックス】

・音のでるおもちゃを作るとなったときに耳の不自由な人はどうやって遊べるだろうと考えました。おもちゃを作るとなった時に、色々な人が楽しいと思えるおもちゃを作りたいなと思いました。子どもにとって遊びが大切だということ、その遊びをするためのおもちゃを作るといふことの凄さに気づきました。おもちゃを作る楽しさを知れたので、これからおもちゃについて色々疑問を持つなどして興味を持っていきたいと思いました。

・音のでるおもちゃを制作し、特に思ったことは、音をだすにも様々な工夫が必要であるとわかりました。具体的にいうと、例えば木の囲いに鈴を入れるだけではなく、木の厚さや鈴の大きさを考え作らないと鈴の音がでないなど、よくない部分がたくさん出て、改善点が増えることに気づきました。また、子どもの発達段階に合わせ、試行錯誤する大切さに気づきました。なぜなら、おもちゃを作る時は、子どもがおもちゃで遊び、どのような力を育てたいかを考えながら作ったからです。そのねらいを考え、発達段階を理解し、試行錯誤を何度も行ったからです。

・おもちゃをつくるということが、とっても大変だということを感じました。デザインを考えるということだけで、形、どんなものにするかで頭を悩ました。ただいっぱい遊べるおもちゃではだめで、どんなことをその遊びで学んでほしいかなどを考える必要があり、グループで何度も話し合い、出来上がっていくことが感じられました。専門演習のメンバー内で討論することでよりよいおもちゃができていくことに楽しさを感じることができました。れもん会社さんと何度も相談し、試作品ができた時、感動しました。私たちの思い、考えを再現して下さっていて良いものができたと思いました。子どもの興味があるもの、好きなものは実習を通して学んだことを生かしました。実際に子どもたちが私たちの作ったおもちゃで遊んでいる時に、集中して遊んでいる子、「面白い」と言っている子など様々な反応をみることができ、おもちゃを通してまた一つ子どもたちについて学べたと思いました。

・音のでるおもちゃを制作して、トイボックスは、色々な遊び方があるため、積み木を振って音を聴いて喜ぶという姿は少なかったように感じた。だが、私たちの考えとはまったく違う遊び方をしていたり、子どもたちだけで遊び方を見つけたり、発展させられるようなおもちゃを作ることができたのは嬉しかった。自分たちで形やどのようなおもちゃの対象年齢など一からおもちゃを作って子どもたちの予想される行動だったり、遊び方だったり、考えられるレパートリーが増えたかなと感じました。子どもたちが笑って遊んでいる姿をみて、作ってよかったなと思いました。また色々な子どもたちに遊んでもらうことができたならよいなと感じました。

設問Ⅳ 専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱを通した学びについて述べてください。

・一年間を通して音のでるおもちゃについて調べたり、自分たちで作ったり、れもん会社の方と協力しておもちゃを作ったりし、とても楽しく学ぶことができました。グループに分かれて一から図や中身を考えることから始まり、何度もれもん会社の方にプレゼンをしたり、相談したりとても大変だったけれど、とても楽しくて一番思い出深いなと思っています。たくさん考えた結果とっても良いものを作っただけで頑張っただけ良かったなと思いました。

・自分が理想とするおもちゃを考えてグループごとに考えました。れもん会社に訪問させてもらい、沢山の経験をさせてもらいました。子どもたちの反応を見たら、とても嬉しくなり、頑張っただけ良かったなと思いました。この経験を生かしていきたいです。

・どんなおもちゃにするか、何歳を対象にするかなど何度も話し合い、れもん会社さんと話し合い、出来上がった時の達成感は凄く気持ちがよかったです。すみれが一でんで実際に子どもたちに遊んでもらい観察すると、子どもはこんな遊び方をするんだという発見をすることができました。この経験を働いてからも生かしたいと思いました。

・耳、目、手沢山の楽しみ方を発見しました。子どものことを考えておもちゃを作ってみたかったのが本当に貴重な楽しい経験でした。子どもたちの遊んでいる姿を見れたのもひとつ勉強になりました。来年の学生たちも参考として私たちも見て、もっと改善や新しいデザイン、アイデアがでると嬉しいなと思います。

・いつか得られた知識や技術、考えやひらめきをどこかで使えたらなと思います。

・テーマが目が見えない子や耳の聴こえない子でも楽しめるおもちゃを作るということだったので難しく感じました。なぜなら、目が見え、耳の聴こえる私たちにとっては気持ちや状況になることはないため、考えたり、気持ちを近づけたりするのが難しかったです。しかし、今までの学校の学習やれもん会社の方々のアドバイスがあったから音のでるおもちゃの開発を進めることができたんだなと終わってみて凄く思いました。実際におもちゃを子どもたちが遊んでいる時の表情や言葉などを近くで見たり聞いたりすることができ、子どもの姿を沢山観察することができました。また、保護者の方々の表情や言葉（子どもを見つめる姿、一緒に遊ぶ姿、子どもにかける言葉）も観察することができ、貴重な体験となりました。しかし、子どもや保護者を観察し、そこから様々なことを読み取る力がまだまだと感じました。

・音のでるおもちゃ作りに取り組み、カホンという打楽器をモチーフとしたおもちゃを考え、れもん会社の方々と案を出し合い、スポンジを取り付ける、大きさを子どもが丁度持てるようにする等の安全面、手や犬、猫のイラストを描くという視覚面、転がす、叩く、揺らす、等様々な方法で音のでるように工夫をした。自作の物を作り、保育に取り入れるということを恐れずにこの先現場で実践することができればよいなと思っている。

・れもん会社さんとコラボさせていただき、目だけではなく耳や手触りなど五感をフルに活用して楽しむことができる遊びを展開した。

5. 考察及びまとめ

2018年度は、3種類の音のでるおもちゃを学生が主体となり一から発案し、れもん会社の職員の方々と話し合いを重ね、試行錯誤しながら完成させることができた。音のでるおもちゃの制作過程では、学生それぞれが「音」をどのように親子に楽しんでもらうか、どのような「音」を聴いてほしいか、さらにはこのおもちゃを介してどのような遊びにひろがるかを考え、想像（創造）し、「音」と「遊び」への探究心をもちながら取り組む姿が見られた。れもん会社は、実際におもちゃの制作及び販売をしているため、子どもの発達とおもちゃの関連性、おもちゃの素材の選択や安全性等について常に意見交換をすることができた。さらに、現場の視点から大変貴重な意見を得ることができ、学生は、多面的で深い学びを積み重ねていったことが観察記録から分かる。

設問Ⅲの記述にもあるように、音やおもちゃについての学びや知識を深めただけではなく、社会の一員として学外の方々と協働し、自らの思いや願いを表現し、相手に伝えることの難しさや楽しさ、大切さを実感したことが観察記録からも読み取れる。さらに、仲間と試行錯誤を繰り返し、「モノ」をうみだし、さらには、「モノ」を作り上げることの情熱や達成感も同時に味わえたことが分かる。

保育実践では、子どもは、学生が想像した遊びをはるかに超え、さまざまな遊びに発展していくことを間近で体感することができたと考える。限られた時間ではあったが、保護者と対話し、かかわる貴重な機会を得た。設問Ⅰの回答では、月齢によって遊び方の違いを改めて認識した学生の記述もある。また、設問Ⅱの回答にもあるように、実習とは異なり、子どもや保護者と同時にコミュニケーションをとることの難しさや戸惑いを感じる学生も少なくない。今回の体験で得たさまざまな思いや考えは、将来、日々の保育や子育て支援・保護者支援に携わる際に大いに役立つことになるだろう。

今回親子に紹介したおもちゃは既存の楽器からヒントを得ているものもあるが、親子ともに初めて出会うオリジナルのおもちゃであった。このため、親子一緒におもちゃに興味をもって遊ぶ姿が見られた。本プロジェクトの一つのねらいであるおもちゃを介した子どもの姿、そして親子のかかわりについて知ることができたことは意義深い。

本プロジェクトのように、子どもの興味や関心に応え、こどもの心身の発達を支える手作りおもち

やの制作を積極的に行っている保育・教育現場がある。設問Ⅳの感想にあるように、保育者自らが考案したおもちゃを是非保育に取り入れてほしい。

最後に、「音のでるおもちゃ制作プロジェクト」を通して経験したさまざまな学びを、今後社会で役立ててほしいと心から願う。

謝辞

本研究は、研究の趣旨にご賛同いただいたれもん会社のご協力及びご支援を得て実現することができた。心より御礼申し上げます。職業指導員花染孝典氏、生活支援員高見則子氏には毎回、学生とのミーティングに参加していただき、プロジェクトが円滑に進むよう多大なご支援をいただいた。重ねて感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成30年度学長裁量経費による支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

文献

- 1) 社会福祉法人湘南学園，ともに生きる
湘南学園は、明治37年に滋賀県に生まれ、現在児童養護施設、幼保連携型こども園、障害福祉サービス事業所、母子生活支援施設を開設している。れもん会社は、就労継続支援事業B型、就労移行支援事業の利用者が「ものづくり班（木工、織・刺しゅう）」「クッキー班」の2班に分かれそれぞれ手作業でものづくりを行い、障害のある人が、地域で自立して暮らし、働くことのできる社会の実現を目指している。また、「れもんのお店」を併設し、手織りの「さをり織り」「刺しゅう」で袋ものから生活雑貨、おもちゃを販売している。【URL】<http://shonanhouse.com/lemon/>
- 2) れもん会社(2018)，れもんタイムズ地域限定版 VOL.78
- 3) 前掲
- 4) 民音音楽博物館（2018），世界の民族楽器図鑑，株式会社河出書房新社，p.147